

第4回

資料3

1 普通系学科について	・・・1
2 商業科について	・・・6
3 家庭科について	・・・9

1 普通系学科について

1. 配置状況

大学 科	学 級 数	定 員	小 学 科	砺波学区			高岡学区			富山学区			新川学区		
				学 校	学 級 数	定 員	学 校	学 級 数	定 員	学 校	学 級 数	定 員	学 校	学 級 数	定 員
普通	82	3,240		砺波	4	160	高岡	4	160	富山東	6	240	魚津	4	160
				南砺福野	4	160	高岡南	4	160	呉羽	6	230	入善	4	140
				石動	3	120	大門	3	120	富山南	5	200	桜井	3	120
				南砺平	1	30	新湊	3	120	八尾	4	160	滑川	2	80
							福岡	3	120	富山西	4	160	雄山	2	80
							氷見	2	80	富山	4	160			
										富山中部	4	160			
										富山北部	3	120			
理 英 数 ・ 英 語	6	240	理数科学・ ※ 人文社会科学				高岡	2	80	富山	2	80			
国 際	4	135	国際	南砺福野	1	30									
			国際交流					伏木	3	105					

※探究科学科は理数科学と人文社会科学の2学科の総称

(令和6年度募集定員)

○普通科コース設置状況

砺波学区	高岡学区	富山学区	新川学区
	大 門(情報) 高 岡 南(人文科学) 福 岡(英語)	八 尾(福祉) 富山北部(体育) 富 山 東(自然科学) 富 山 南(国際) 呉 羽(音楽)	入善(自然科学) (観光ビジネス)

2 志願状況と欠員状況 (過去10年間)

学 科	H26年度		H27年度		H28年度		H29年度		H30年度		R1年度		R2年度		R3年度		R4年度		R5年度		<参考> R5募集定員
	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員			
普 通 科	1.06	11	1.05	18	1.11	13	1.10		1.04	20	1.02	36	0.99	14	0.99	31	0.98	65	1.01	39	3,260
探 究 科 学 科	0.92		1.08		1.26		1.51		1.86		1.91		2.13		2.00		1.75		1.65		240
国 際 科	1.18	1	1.14		0.96	6	1.10		0.98	8	0.96	6	0.68		0.88		0.84	5	0.55	37	150

3 関係高校長からの意見

【学科・コースの見直し】

○普通科以外の普通教育を主とする学科(以下、「新たな普通科」という。)

- ・グローバル化の進展など時代の変化に対応するため、より高度な国際教育や英語教育が一層重要となっていると考える。
- ・令和4年度より、普通科以外の普通教育を主とする学科が設置可能となり、「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」などが設置できることとなった。すでに大学や地域と連携した取組みを行っている学校もあり、現在の普通科を新たな普通科と位置付けることも考えられる。
- ・文理問わず英語によるコミュニケーション能力が重要であり、現在のコース等における取組みをさらに幅広い生徒を対象とし実践できるよう、新たな普通科を設置することも考えられる。

○新たなコース、コースの改編

(データサイエンス・情報に関するコース)

- ・データサイエンス教育を取り入れ、グローバルビジョンを持つ生徒を育てる、特色ある取組みを通して学びを深める、新たなコースへと改編することも考えられる。
- ・データサイエンス教育で身につくのは、データサイエンスの知識ではなくリテラシーであり、学びのプロセスである。そして、未来社会をとらえるための「ものの見方・考え方の枠組み」が身につくと考える。
- ・データサイエンスは理系のイメージがあるが、データデザイン、デザインアート思考といった見えないものを見える化して、データを有効活用する力が多くの分野で重要となっている。これからの社会では文理問わず必要な力になる。
- ・「情報活用能力」「データサイエンス」についての基礎を学び、大学で深く学ぶことで、将来はデータサイエンティストやデータアナリストとして活躍する人材を育成することも考えられる。
- ・大学での実験などの実習はこれまでも行ってきたが、その機会を多くし、数学や統計学、プログラミングなどの知識を活用して、莫大なデータの分析などを行い、有益な知見を導き出すデータサイエンスの分野を学べるコースにしていくことも考えられる。
- ・国家試験(基本情報技術者試験など)の合格を目指した取組みや、情報分野に関わるコンテスト等への参加を進めていくことも考えられる。

(グローバルな視点に立ったコース)

- ・生徒や保護者からは、すべての生徒に高いレベルの英語教育を行った上で、さらに文系、理系大学等へ進学できるような学習指導を期待されている。理系の生徒にも英語でディスカッションできるような力も必要とされるが、そういった力を育成する機会の確保が難しい。
- ・国際バカロレアのグローバル化に対応した素養・能力を育成する教育プログラムも参考に、英語を使って仕事を進めるグローバル人材(県内・国内・海外)の育成を目指した探究活動を行うなどの方法も考えられる。
- ・日本を発信する力や、グローバルの考え方も必要。発信力を高めるために、日本を知ること、日本語活用能力が必要。国際バカロレアプログラムのそういった部分を取り入れる方法も考えられる。
- ・海外語学研修や国際交流を推進するため、外部との連携事業などを担当する人員を複数配置する必要がある。

(様々な科目の選択が可能な総合コース)

- ・現在も多くの選択科目を開設している。さらに科目数を増やすことは教員配置などの面から難しいが、総合コースのようなことも考えられる。
- ・1年生の時にしっかりとキャリア教育を行う必要があり、科目選択に向け、進路目標を生徒が確立できるよう指導しなければならない。

(その他)

- ・地域と連携した活動の中で、郷土の魅力に気づく機会を持てるようなコースも考えられる。

- ・子どもから大人までの成長や発達、支援に対して興味関心を持つ生徒を幅広く対象とするコースも考えられる。大学教員、カウンセラー、小中学校教員など外部人材を活用した多彩な講義や演習を通じて、自らの成長を実感させ、教育現場のみならず一般企業でも幅広く活用できる能力の伸長をめざす。

※コース改編・設置の課題

- ・コースでは、体験学習を中心に専門的で特色ある学習活動に取り組んでいる。中学生側にも現在のコースの内容が浸透していることなどを考えると、改編の必要性は少ない。
- ・コースでの定員割れはコース以外の普通科の入学数が増え、クラスを40名超の人数で編成することになり、教育環境が悪くなる。このため、中学生のニーズを検討の視点に入れることも重要。
- ・中学校段階では、将来の進路を明確に決めにくく、学科やコースの内容が特化しすぎていると選択しづらい。学科・コースの見直しは、幅広い視点に立つ必要がある。
- ・生徒や保護者は、高校卒業後の進路に関心が高い。コースにおける学習活動がどのような力につながるかを明確にすることが大切。
- ・普通科にコースを設置する場合、授業数は増加するが教員数が増えるわけではないため、教員の負担増につながる可能性がある。スクラップアンドビルドの考え方も必要。
- ・コース担当者は、外部との連携調整などの負担が大きい。
- ・探究活動や教科横断的な学びにも言えることだが、日頃の基礎的な学習活動の積み重ねがあつてこそ、特色ある学びが可能となる。

【学科の配置・定員設定等】

- ・小規模校では大規模校に比べ、生徒と先生の関わりが深くなると感じるが、色々な生徒と触れ合う機会が少ない。
- ・小規模校には、生徒一人ひとりに目がとどきやすいなどのメリットもある。このメリットを生かす工夫をしていくことが必要。
- ・3学級校での学校運営は苦しい。生徒の学習活動や様々な活動の支援で教員の負担が大きい。
- ・小規模校では部活動数が減少しており、団体競技が成り立たないこともある。
- ・大規模校では多くの生徒がいることによって、色々な先輩や同級生に出会い刺激を受けることができ、生徒が伸びる要素となっている。

【魅力発信等】

○現在の取組み

- ・地域の観光資源等を題材にフィールドワークなどを行い、探究活動の充実を図っており、自らの地域を振り返り、地域の魅力を再発見するよい機会にもなっている。
- ・生徒が地域の魅力を紹介する観光案内リーフレット(日本語)を作成中で地域等へ配布予定。来年度以降、英語、韓国語等でも作成する予定。
- ・ボランティアバンクに約200名の生徒が登録し活動を行っている。文化祭には、福祉事業所から障がいを持つ方々が来校されたが、生徒が率先して対応できており福祉マインドが醸成されている。
- ・探究活動の内容を紹介する広報誌を作り、地域に回覧している。
- ・学校設定科目の中で、1年間の前半は日本語による授業で、朗読、スピーチ、ビブリオバトル、短歌、エッセイなどを扱う。後半は英語科の授業で台湾の高校生とオンラインで意見交換している。
- ・富山市と連携し、SDGsに関連するプロジェクト学習を行っている。
- ・普通科と職業科が合同で探究活動の発表会を行っており、他の学科の取組みを知り、よい刺激を受け合う機会となっている。

○今後の取組み

- ・地元の観光ボランティアへの協力要請があり、部活動等の取組みとすることを検討している。
- ・コロナ禍で実施できなかった地域のイベントに参加したところ、大変好評だった。今後も積極的に参加していきたい。
- ・情報発信の方法を工夫して、今やっている取組みを知ってもらうことが大切。
- ・学校のプロモーションビデオを作成した。今後、VRを活用した学校紹介動画を作成する構想もある。

4 視察報告（新たな普通科・普通科コース）

【京都市立開建高等学校】（京都市南区）

①学校概要

- ・ ルミノベーション科（新たな普通科：地域社会に関する学科）定員 240 名
- ・ 塔南高校（普通科、教育みらい科）を開建高校（ルミノベーション科）として全面的に改編し、令和 5 年 4 月に開校。

②特色ある取組み

- ・ ラーニングポッド（L-pod）と称する独自構造の教室で、特徴的な授業を行う。
- ・ 80 名×3 クラスとして編成。時間割上も 80 人 1 クラスを 1 コマとする。
- ・ 多くの授業で生徒 80 名に対して教員 3 名が出講（教科・科目による）。
- ・ 場面に応じて 80 人で一斉授業や、パーテーションで仕切って 3 展開で授業を行う。

③施設設備等

- ・ 通学利便性が高い洛陽工業高校跡地に、校舎・グラウンドを全面的に新築整備。
- ・ 特別教室をのぞく普通教室を、通常の教室 4 室分の広さをもつラーニングポッド（L-pod）として設計。1 室として広く使用したり、パーテーションで仕切って 2～4 室として使用したりできる。
- ・ 各教室に電子黒板（3 機）や音響機器（マイク・スピーカー）を設置

④成果と課題



- ・ 普通教科の授業時数確保、大学入試に必要な学力を育てることより、生徒の自主性や積極性、考えをまとめて表現し、伝える力など生きる力を育むことを重視している。
- ・ 学校説明会では、中学生に特徴的な授業を体験してもらい、学校選びの判断材料としてもらっている。
- ・ 開建高校では、服装・頭髪に関する校則を廃止。運転免許は取得可（通学には認めない）。アルバイトは届出制。
- ・ 従来 of 教科指導、進路指導、生徒指導の考え方とは大きく異なる教育を目指しているため、校内教職員の意識改革と共通理解が課題。

【兵庫県立夢野台高等学校】（神戸市長田区）

①学校概要

- ・ 普通科7学級（うち教育・心理類型 40名）
- ・ R4年度入学生より「教職類型 定員24名」から「教育・心理類型 定員40名」に改編。
- ・ 類型の志願倍率はR5=1.58倍、R4=1.70倍、R3=1.92倍。
- ・ 類型は人気が高い。

②特色ある取組み

- ・ 「教員を多く輩出しているところが本校の特色。この魅力をさらに際立たせよう」という校内教職員の発想から、H22に教職類型を立ち上げ。
- ・ R1頃「教職類型をさらにパワーアップさせるため、心理学の要素を取り入れよう」という意見が校内教職員からあがった（高人気は維持）。R2に検討し、R4の改編で「教育・心理類型」を導入。
- ・ 入学後、1年次は類型生徒のみでクラスを編成。2～3年次は他生徒と混成で文系クラス、理系クラスを編成。
- ・ 1年次から類型の活動を開始。2年次が実習等の中心期、3年次の負担が軽くなるよう計画。入学直後の1年生は、やる気があって前向きな時期。この時期を逃さず取り組ませることで、高い効果があがる。

③施設設備等

- ・ 書道教室を改修し、壁2面に大ホワイトボード、天吊り液晶プロジェクター2基、3～5人のグループ学習にも利用しやすい台形机を設置し、「ゆめのリサーチルーム」を整備。「机なし、椅子あり」なら80名が入れる程度の広さ（写真参照）。

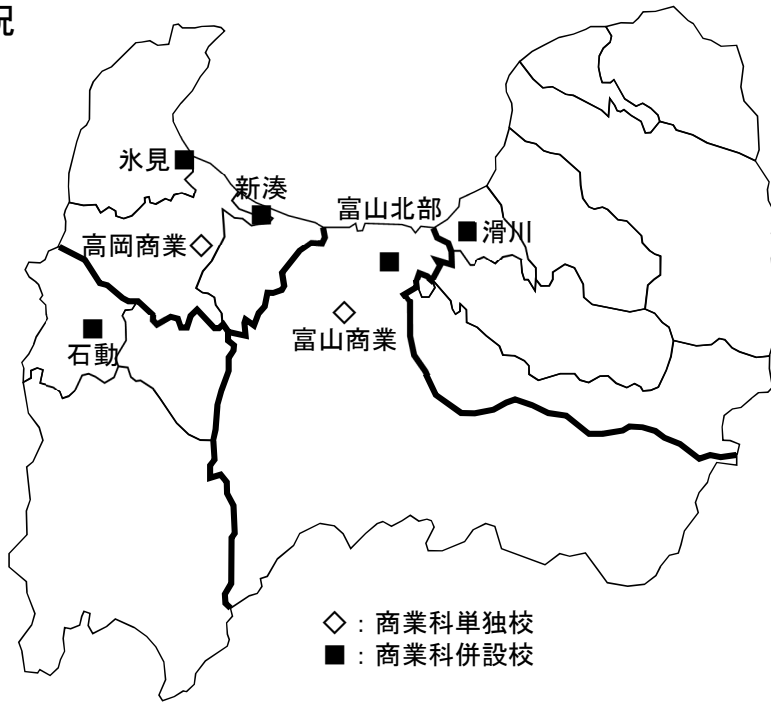


④成果と課題

- ・ 類型の実習のための特別な予算はなく、複数の事業予算を活用し、類型の生徒から徴収する集金とあわせて実習経費に充当している。
- ・ 教育や心理を専門とする教員の配置はない。
- ・ スポーツ心理や消費者心理などに興味をもつ生徒が多く、「心理」は中学生の人気も高い。
- ・ R5 大学入試では26名が教育系学部に進学している（類型以外の生徒も含む）。他学部に進んでも、教員免許を取得して最終的に教員に採用される者もいる。

2 商業科について

1. 配置状況



砺波学区	高岡学区			富山学区		新川学区
石動■	高岡商業◇	氷見■	新湊■	富山商業◇	富山北部■	滑川■
商業科 (40)	流通ビジネス科 (80) 国際ビジネス科 (40) 会計ビジネス科 (40) 情報ビジネス科 (40)	ビジネス科 (40)	商業科 (40)	流通ビジネス科 (80) ビジネスマネジメント科 (40) 会計ビジネス科 (40) 情報ビジネス科 (80)	情報デザイン科 (40)	商業科 (40)

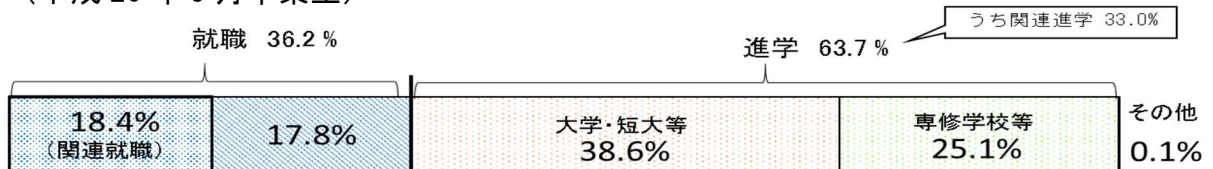
() 内は R6 年度の募集定員

2 志願状況と欠員状況 (過去 10 年間)

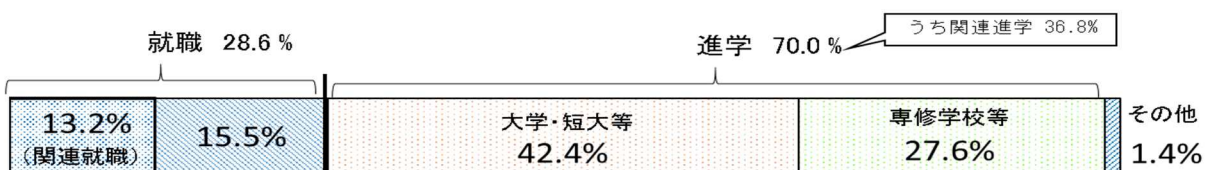
H26年度		H27年度		H28年度		H29年度		H30年度		R1年度		R2年度		R3年度		R4年度		R5年度		<参考>
倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	R5募集定員
1.36		1.25		1.20		1.14		1.33		1.24		0.95	2	1.21	1	0.97	8	1.12	4	640

3 進路状況

(平成 26 年 3 月卒業生)



(令和 4 年 3 月卒業生)



4 関係高校長からの意見

【学科・コースの見直し】

- 富山商業高校では、起業家を視野に入れた取組みを重視しており、令和4年度に学科名を変更した「ビジネスマネジメント科」の名称が起業に結び付くイメージを持ってもらいやすいと感じる。
- 高岡商業高校も令和4年度に学科名を変更して4学科構成とし、社会人基礎力の育成をベースとして専門性を高めることに重点を置いた。ただ、「国際ビジネス科」は英語によるコミュニケーション能力の育成とグローバルな経済社会の動きを学ぶことを主な内容としているが、中学生にとっては、普通科の英語コースとの違いが分かりにくいかもしれない。
- 商業科を普通科コース等に改編
 - ・専門科目の授業が減るため、実践的な学習サポート体制の構築に工夫が必要となる。
 - ・中学生にとって一般的な普通科で学ぶ場合との差異や、卒業後の進路先等が見えづらい。
 - ・商業科に在籍して各種検定や部活動などに傾注したいと考えていた生徒が、共通教科への学習負担が増加することで、本校への志望を断念するのではないか。
 - ・こうしたデメリットはあるものの、中学生の進路希望や、今後の中学校卒業予定者数の減少を踏まえ、全国の状況などを研究していく必要がある。
 - ・富山北部の情報デザイン科のように、デザインを看板に掲げた商業科は全国的にも珍しく、活動内容も地域密着かつ先進的であるため、改編の必要はないと感じる。

【各学科の配置・定員設定等】

- 商業科の中核となる高校の学校規模を維持する必要がある。
 - ・富山商業高校では、TOMI SHOP の取組みをはじめ、デザイン思考*の人材育成を目指した外部講師による講演会の開催や、産学官の連携を進めている。
 - ・高岡商業高校では、様々な企業と連携した商品開発、模擬株式会社による地域の商店街やイベントでの販売のほか、富山大学経済学部との連携など様々な取組みを行っている。
 - ・これまでの取組みを継続、充実させていくためにも富山商業高校、高岡商業高校の学校規模を維持し、生徒数、教職員数を確保する必要がある。
 - ・普通科併設の商業科では、商業科の教員数が少なく検定試験などの負担が大きいなどの課題がある。今後の学級減も含めて考えると商業科を普通科コース等に改編することなどを検討していく必要がある。
- 総合制高校の小学科数維持を検討する必要がある。
 - ・商業科を普通科コース等とした場合、複数の職業科を併設する総合制高校としての魅力や特色を薄めてしまうことになる。
 - ・4つの専門学科が連携して、農業科と水産科が作ったものを家庭科が料理のメニューを考案し、商業科がそれをどう売るかを考えるという取組みを始めたところである。
- 商業科に在籍する女子生徒は地元への就職割合が高く、地域における女性活躍という観点からも商業科の配置は必要がある。

【魅力発信等】

- 模擬株式会社と称して地域の商店街やイベントに年20回程度出店している。多くの方に知っていただけるよう情報発信していきたい。
- 地域との連携、企業と共同した商品開発、観光ガイドなど、様々な活動を行っており、うまくPRしたい。
- 普通科と商業科を併設する学校では、二つの学科が連携してイベントへの参加など、地域連携活動に取り組んでいる。
- 商業科の卒業生の現状は、就職や進学など様々である。高校生活における様々な体験や取得資格を生かした普通科とは異なる大学入試の形態もある。また、県外の大学を卒業後、地元に戻って地域に貢献している生徒も多い。
- 最近の生徒は、HPもあまり見ない。SNSでの情報発信も必要になってきている。

※デザイン思考：(問題を解決する方法を)設計(Design)するための考え方(Thinking)

5 視察報告（普通科コース）

【東京都立五日市高等学校】（あきる野市五日市）

①学校概要

- 令和2年度 商業科募集停止による学科改編
普通科2学級・商業科2学級 ⇒ 普通科4学級
- | | | | |
|--|---|-----------|-----|
| | } | マネジメントコース | を設置 |
| | | アウトドアコース | |
| | | アドバンスコース | |
- 生徒が進路希望に合わせて、共通教科の他、商業科目も選択できるアドバンスコース、商業科の伝統を受け継ぎながら関係機関や地域企業等との連携などによる新しい教育活動を実践するマネジメントコースや、五日市周辺の自然を十分に生かした新しい教育活動を展開するアウトドアコースが設置された。

②特色ある取組み

- 学校設定科目として、マネジメントⅠ・ⅡやアウトドアⅠ・Ⅱ（単位数6）を設定し、各コースの生徒が受講。連続した6時間の授業を実施。
- マネジメントⅠ・Ⅱでは、商品開発や課題研究のような活動、起業学習、高大連携、インターンシップなどを行い、必要に応じて資格取得に向けた取組みも実施。
- アウトドアⅠ・Ⅱでは、トレイルランニングやボルダリングなどの活動を外部講師の指導を受けながら実施。
- マネジメントコースは嘉悦大学や東京経済大学と、アウトドアコースは駿河台大学や東京女子体育大学と連携し、生徒が大学を訪問して大学生向けの講義を受講、または五日市高校生向け特別講義を実施。
- あきる野市商工会と協定を結び、インターンシップ等の企業連携を実施。

③施設設備等

- 商業科閉科に伴い、商業科で使用していたパソコンを1学級で使用する分だけに集約。
- 複数あったパソコン室や商業科で使用していた教室を講義室等に転用。
- アウトドアコース設置に伴い、武道場にボルダリング設備を設置。



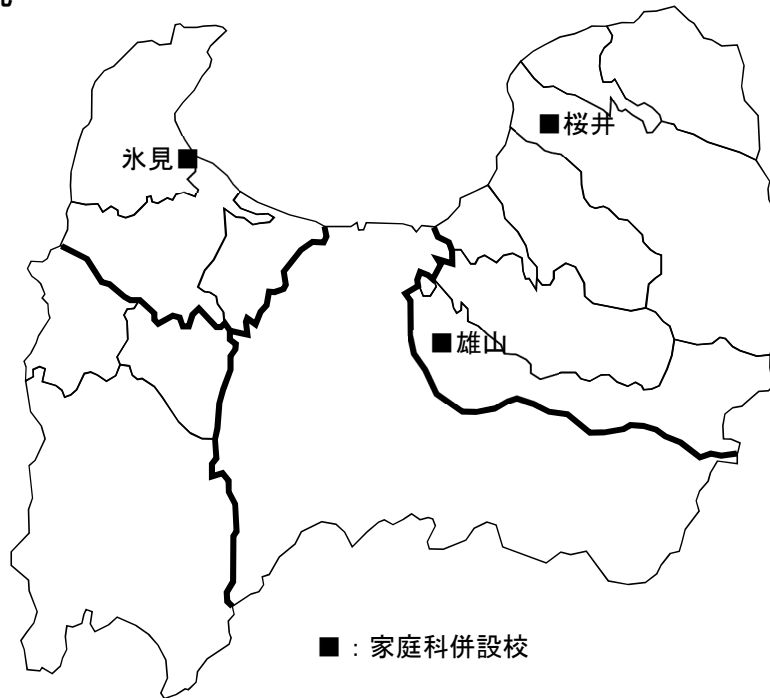
（パソコン室における商業の授業）

④成果と課題

- 商業科では、主に資格取得に向けた授業を実施していたが、学科改編後は、資格取得以外のこれまでできなかったことができるようになり、自由度が高くなった。
- 商業科の生徒は、資格を取得することに対する意識が強かったが、学科改編後は、多くの生徒が、地域貢献など様々な活動に取り組み、自分の成長につなげている。

3 家庭科について

1. 配置状況



砺波学区	高岡学区	富山学区	新川学区	
—	氷見■	—	雄山■	桜井■
—	生活福祉科 (40)	—	生活文化科 (40)	生活環境科 (40)

() 内は R6 年度の募集定員

2 志願状況と欠員状況 (過去 10 年間)

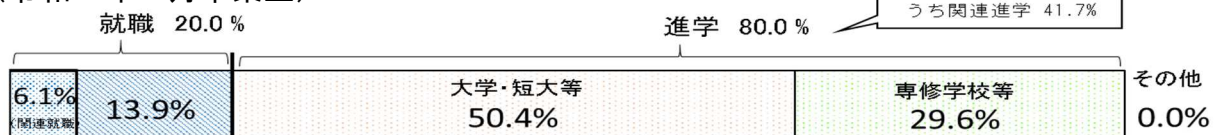
H26年度		H27年度		H28年度		H29年度		H30年度		R1年度		R2年度		R3年度		R4年度		R5年度		<参考>
倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	倍率	欠員	R5募集定員
1.56		1.04		1.62		1.04		1.00		1.28	1	0.92	3	1.16	1	0.88	11	1.20		120

3 進路状況

(平成 26 年 3 月卒業生)



(令和 4 年 3 月卒業生)



4 関係高校長からの意見

【学科・コースの見直し】

- 学習活動により身につけた調理、被服、保育、福祉の技術は、人々の生活に深く関わりがあり、個々のウェルビーイングを持続的に向上させることができる学科である。
- 学習する題材が身近で課題を見つけやすいため、日常的に課題解決型の学習となり、卒業後も学び続けようとする深い学びに結び付いている。
- 課題研究ではSDGsに関連するエシカル消費のことなど、実社会における課題解決等をテーマとして、今後、さらに充実させていくことを考えている。
- 専門学科「家庭科」ならではの学校家庭クラブでの活動(ボランティア等)に取り組んでいる。
- 家庭科の見直しについて
 - ・家庭科を普通科のコースにした場合、専門教科の科目数が減るため期待される効果が得られなくなるのが危惧される。
 - ・社会の変化に応じた学習内容を検討し、学科名の変更や複数のコース制を設けることも考えられる。
 - ・学習内容の改編には、専門分野の教員の確保、施設・設備の整備などの課題もある。
 - ・時代の変化を踏まえ、学習効果に貢献してきた資格取得のあり方の検討が必要な場合もあると考えられる。
 - ・家庭科においても科目「生活と福祉」などを履修し、家庭看護や高齢者福祉の基礎を学んでおり、福祉系の短大・専門学校へ進学できる学びの体系づくりも考えられる。

【各学科の配置・定員設定等】

- 家庭科として果たしている役割がある。
 - ・家庭科の入学生の多くは、保育士や調理師、栄養士など生活関連産業分野に進みたいといった高い目的意識をもって志望しており、卒業生は3年間の学習活動によって目的を達成している。
 - ・これまでの地域との繋がりという財産、家庭科だからこそできる活動、家庭科の生徒として全国の生徒と交流できる場が確立されていることなどから学科としての取組みを継続させていきたい。
 - ・今後の学級減によっては、学科構成を検討する必要があるが、現時点では中学校から一定程度のニーズがある。
 - ・中学校卒業予定者数の減少や、普通科割合の低下を踏まえ、将来的には、普通科のコースや総合学科の系列として選ばれる魅力ある家庭科の教育内容を配置することも検討する必要がある。

【魅力発信等】

- ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動での実践を伴う研究活動を広く発信していく。
 - ・赤い羽根共同募金の模様の布を使ったエプロン製作(地元社会福祉協議会からの依頼)
 - ・交通安全週間のマスコットをつくり保育所の子どもたちにプレゼント
 - ・子ども食堂での食育活動や運営補助
 - ・専門学科を持つ学校が中心となり、他校の学校家庭クラブと協働して活動を行う。
- これまで行ってきた地域連携(保育所や福祉施設での交流活動、地元特産物を使った商品開発など)を充実し、さらにPRする。
- 例えば、高校生が商品開発を行う、コラボレーション企画としてデザインした食品を販売する、大学と共同で研究することなどに取り組んでいく。